
まどか エンド～もうひとつの未来～

竜田殿下

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まどか エンド〜もうひとつの未来〜

【Nコード】

N5804V

【作者名】

竜田殿下

【あらすじ】

「魔法少女まどか マギカ」と「ヒーロークロスライン」のクロス小説。

歪んだ世界の中で、因果の鎖に囚われた少年と少女はその運命に抗い続け未来を掴みとろうとする。

魔法少女とノッカーズ、交わることのなかった二つの存在が融合を果たす時、その可能性は無限となる。

ブローグ〜夢〜（前書き）

いや〜こりもせず再びHXLのクロスものです；
しかし！私は絶対に需要の低さなどには屈しません！それではどうぞ！！

プロローグ〜夢〜

少女は走る。白と黒に支配された空間の中をその目的もわからないまま走り続ける。息を切らしながら走り続け、見つけ出したのはどこにでもあるありふれた非常口のサイン。少女は階段を昇り、非常口と指し示された扉を躊躇^{ためら}いなく開けた。

そこはまるで別世界のようなだった。少女の立つ場所は巨大な枯木のようなオブジェの上、その周りは文明の終わりを告げるかのように荒廃したビルが立ち並び、不思議なことに崩れたビルの瓦礫^ががあちこちで浮いている。

最も異質だったのは空だ。そこには太陽を覆い隠すように“何か”が浮いている。それは圧倒的な存在感を出しながら、その姿は全く口で言い表すことができない。

そんな世界の中で次に目に止まったのは、空に浮く巨大な“何か”に立ち向かう長い黒髪の少女の姿だった。見た目こそ普通の女の子だったが、その少女は颯爽と空を飛び“何か”と戦っている。状況は劣勢のようで黒髪の少女は“何か”から飛び出す七色の光や瓦礫による攻撃に防戦一方となっていた。

何故だか分からない。だが、それを見ていた少女はその状況に嘆かずにはいらなかった。

「ひどいっ！」

少女のこぼした言葉に、近くにいた何者かが言葉を返す。

「仕方ないよ、彼女一人では荷が重すぎた。でも、彼女も覚悟の上だろう。」

少女は声のした方を向く。そこにはウサギともネコともイタチとも形容しがたい白い小動物がいた。そんな生き物がこちらに話しかけてきたというのに少女はどう言う訳か不思議に感じることは無く、そこに居るのが当たり前かのように振舞う。

視線を空へ、黒髪の少女が戦っているほうへと戻す。状況はよくなるどころか悪化の一途をたどっている。“何か”の攻撃で鉄骨へと叩き付けられる黒髪の少女。それを見た少女は胸が張り裂けそうな思いになる。

「そんなっ！ あんまりだよっ！ こんなやつて無いよっ！」

少女が嘆きの思いを口に出している間にも、黒髪の少女は追い詰められてゆく。黒髪の少女は倒れながらも、こちらを見ている少女に何かを言っているようだったが、その声はまるでテレビを消音にしたかのように聞こえない。心配する少女の側で白い生き物が囁く。
「諦めたらそれまでだ」

白い生き物の言葉に耳を傾ける少女。

「でも、君なら運命を変えられる」

その言葉に微かな希望を感じる少女。しかし、それと同時に言い様のない不安を感じ思わず耳を塞いでしまう。そんな少女に白い生き物は話しを続ける。

「避け様のない滅びも、嘆きも、全て君が覆せばいい。そのための力が君には備わっているのだから」

少女は再び耳を開く。その言葉の真意を確かめるために。

「……ほんとなの？」

力なく落下していく黒髪の少女の姿が映る。

「あたしなんかでも、本当に何かできるの？ こんな結末を変えられるの？」

少女は問い掛ける。白い生き物は表情こそ変えないものの、嬉々としているかのように答える。

「もちろんさ」

目の前に写る愛らしいような、それでいて謎めいた雰囲気を出す白い生き物の姿。

「だから僕と契約して」

本人にも理由が解らなかったが、少女は白い生き物がこの後に何と言つか分かっていった。そして、それに対する自分の返事も。

「魔法少女に」

言葉が終わりを向かえ、少女はその答えを出す。
その時だ。

突然、少女もその隣にいた白い生き物も、戦っていた黒髪の少女もその相手だった“何か”も真つ白な光に呑み込まれてその姿を消した。

その後も少女には意識こそあったが、自分の手すら見えないほど目には光しか映らず、今まで聞こえていた白い生き物の声も目の前で繰り広げられていた戦いによる衝撃音も聞こえず、五感がまともに機能している感覚が無い。只々、永遠と白が続く。

終わることのない白に、少女は声も出せず気が狂いそうになった時、ようやくその目に白ではない別のものが届く。だが、目に写ったその光景は自分の理解を遥かに超えるものだった。

白い空間の中、頭上に広がるのは原型が見えないほど燃え盛る街並み。いや、自身が生まれた惑星、地球そのものが炎の塊と成れ果てて頭の上で轟々と燃えている。とても現実味の湧くものじゃないが、体を襲う凄まじい熱気が妙に生々しい。

そんな非現実の中、少女は自分以外のもう一つの存在に気付く。その姿は自分とは逆さまに浮いているようだったが、地球が真上にあるこの状態ではどちらが正しいとは言えない。

少女は声を掛けようとしたが言葉が出ない。そう思っている間に、謎の人物もこちらに気付いたようでその顔を僅かに振り向かせた。
「ツツツ!？」

少女はその顔に震え上がる。その顔が余りにも異形であり、その表情が涙を流して怒りと悲しみに染め上げられていたから。

……ナゼ……ドウシテ………コンナ………コンナハズジャ

……
声が頭の中に響く。その“異形”から発せられる意味の解らない

謎の言葉が。

——コノママデハオワル……………スベテガ——

やはりわからない。少女には全く、その者の言っている事を理解することは出来ない。だが——

——……………ゴメンナサイ……………ホントウニ……………ゴメンナサイ——

その顔と流れる涙だけは、少女の頭から離れることは無かった。

目を覚ます。少女、鹿目まどかの居る場所はずっと変わらない、ヌイグルミに囲まれた可愛らしい自分の部屋だ。そこで寝巻き姿のまどかは横になったままで呟く。

「……………夢？」

そう言った彼女の目には、一筋の涙が流れていた。

「アハハ！ そりやまた、今日のまどかはずいぶんと凄い夢を見たんだねえ」

水色のショートヘアを揺らしながら、少女は笑って言葉を返した。

「さやかちゃん、そんなに笑わないでよ！ あたしホントに恐かったんだから」

桃色の髪を赤いリボンでツインテールに結んだまどかは、友人である美樹さやかの反応に少々困り顔だ。

「そうですよ、さやかさん。女の子なのですからそのような事はよくある話です」

ウェーブがかった緑色のロングヘアの少女が二人の仲裁に入る。

朝の登校風景、側に川の流れる森林公園のような通学路を歩く3人の少女はお揃いで胸に赤いリボンと襟と裾にフリルの付いた白い上着、白黒のチェック柄のプリーツスカートという制服姿だ。

「いやゝゴメンゴメン。でもさまどか、その夢に出てきたヤツってさ……」

一区切りついたところでさやかは話を戻そうとする。

「うん。最初のほうはよく思い出せないんだけど、最後に見た“大きくて縦に並んだ二つの目と燃えてるみたいに真っ赤な髪”が頭から離れなくて……あゝ思い出してもホントにアレは恐かったゝ」

まどかは夢の中で味わった初めての体験をまるで本当にあつた事のように話す。

「……………」

さやかともう一人の友人、志筑仁美しつきひとみは困惑気味に顔を合わせた。そこから最初に話を切り出したさやかだ。

「あのさ、まどか……今の話を聞いてて思ったんだけど、まどかつて“そいつ”のこと知らないの？」

「！」

その自分の夢の正体を知っているようなさやかの発言にまどかは驚く。

「さやかちゃんは何知ってるの！？ その人のこと！？」

そして勢い良くさやかに詰め寄った。

「いやゝ知ってるも何も……」

あまり見たことの無いまどかの押しに困っているさやかを見て、仁美は代わりにまどかの質問に答える。

「まどかさん、その方ならつい最近までたくさんの報道番組に出ていましたよ」

「へ？ 報道番組？」

きょとんとした顔で仁美のほうを見るまどかに今度はさやかが答える。

「近くの高層ビルで起きた大事件……まどか本当に知らないの？」

さやかに聞かれて、まどかはこれまでの自分の身の回りのことを
思い出す。だが、何度呼び起こしても肝心な所だけ心当たりが無い。
「ごめん……全然わからないや」

別に悪い訳ではないのにしゅんとしてしまうまどか。

「あら、めずらしいですね。私もその方の名は存じ上げませんが、
テレビや新聞で見たあのお姿とお話はとてもショッキングでしたわ」
「あ、アタシ名前なら知ってるよ」

「あら、本当ですか？ さやかさん」

「うん。と言っても、ネットの情報だけだね」。“紅蓮の炎人”^{えんじん}、
“最強最悪の存在”……呼び方は色々あるけど、中でも一番多いの
は……」

ジ・エンド

その力は質量もなく、感情もなく、遺伝や感染という手段も使わ
ずに――

選ばれた人間達と融合を果たした……

常識を超えた力は能力者達の欲望を解放させ……孤独を宿命づけ
た――

この同時多発的に起こった能力者発生現象「オルタレイション・
バースト」は世界中に“能力者”を産みまた能力者達は無数の犯罪
を生んだ。混沌を恐れた民衆は「魔界の扉を叩いた者」という異端
者への決別の意味を込めて能力者達のことを……

ノッカーズ
“Knockers”と呼んだ――

ブローグ〜夢〜（後書き）

やってしまいました。執筆中にも関わらず新作投稿（；、旦那）
こちらの作品は一応、先に出した作品より短めになる予定です。ど
ちらもモチベーションを上げて両立させていこうと思いますので、
どうぞよろしくお願い致しますー（・ー・）ー

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5804v/>

まどか エンド～もうひとつの未来～

2011年8月8日03時39分発行